

# 佐藤一英氏訪問記

都 築 久 義

詩人の佐藤一英氏を、一宮市萩原町高松の自宅に訪ねた。佐藤氏は明治三十二年生まれの八十才。学生時代に熱烈な恋愛の末に結ばれたという、たまを夫人と二人で昔ながらの家に住んでおられる。老齡になって長話はできないが、一時間くらいならよいとのことだったので、二回お訪ねした。

佐藤一英氏の詩業と詩人としての位置づけは、たとえば、吉田精一氏の『近代詩』（至文堂、昭和二十五年十月刊）では、「大正末期から昭和初期にかけて詩を書いた詩人達のうち、超現実派にも行かず、さりとてプロレタリア詩運動にも加わらず、独自の個性を守った人々」として、宮沢賢治、八木重吉、吉田一穂、佐藤一英、山之口漠をあげ、

「羽衣」の叙事詩の如き、新古典詩風に向ひ「新韻律

詩論」を提唱して定形四行詩を試作した佐藤一英[1899— ]など、時風に関係なくおのれを守った例である。彼等は大木惇夫、穴戸儀一、逸見猶吉等と共に、「新詩論」を創刊（昭和七年一〇月）、純粋な象徴主義の系統に立ちつつ、韻律の解放と新しい限定の基準をもとめようとした。その結果、一種の伝統主義的な方向に赴いたことが注意される。

と、評されている。また、近刊の『日本近代文学大事典』（講談社版）でも、かなりのスペースが割かれ、

象徴派の系列から出発し、内容形式ともに古典的傾向を深めるに従い、詩壇の主流から孤立していったが、岩野泡鳴、福士幸次郎のあとをうけ日本詩の韻律の研

究と実践に特異な足跡を残した詩人である。(三浦仁  
執筆)

と、評価してある。特に戦時下、昭和十年代の活躍はめざましく、昭和十四年創設の「詩人懇話会」賞を第一回目に、「空海頌」で受賞し、いっそう彼の名を高めた。ちなみに、第二回は三好達治、第三回は西村皎、第四回は蔵原伸二郎が受賞している。

しかし、今度佐藤氏を訪ねたのは、そうした詩人・佐藤一英の詩の業績についてではなく、詩人以前の佐藤一英氏、とりわけ横光利一たちとの交友のあたりがお聞きしたくてもうかがいした。

佐藤氏と横光利一の出会いは、大正七年四月、佐藤氏が早稲田大学予科文科に入学したことからである。佐藤氏は大正四年に名古屋の第一師範に進学したが、厳格な師範学校の教育にはなじめず、直接的には学校をサポートして芝居見物に出かけたことが理由で放校になり、東京の正則英語学校を経て早稲田にやってきた。

一方、横光利一は三重県立第三中学校(現・上野高校)を大正五年に卒業し、そのまま早稲田に進んだがしばらくして休学、この年に再入学した。そのため二人は同級生になり、さらに学校近くと同じ下宿で暮すようになって、二

人の間柄はいっそう親密になった。

もともと詩人を志して早稲田にやってきた佐藤氏は、早稲田に入るとさっそく級友に呼びかけて詩の研究会を作った。ここに集まったのが、横光利一をはじめ、中山義秀、吉田一穂、小島勲らである。やがてこの仲間たちで肉筆手製の詩集を作り始めた。佐藤氏の記憶では詩集の名は「朗々」。当時のことを佐藤一英氏は河出書房版『横光利一全集第十二巻』月報(昭和三十一年六月)で、

このグループはもともと私が言ひ出した詩の研究会のメンバーだったから、詩が中心で、小説は副であったが、横光は小説を書くかたはら詩を書いて、自分がまっさきに印刷編集をやるよといって、仲間の詩を集め、島田訥郎に絵をかかせて、詩は上等のケント紙に彼自ら清書したものを、写真帖にはりませて、立派な詩集を作ってくれたりした。後に「書方草紙」に入れた詩は横光青春の詩である。(「横光利一の青春」)

と、回想している。

だが、こうしたグループ活動もそれほど長くは続かなかったようだ。大正九年四月の本科進学を前に、佐藤氏は学校に嫌気がさして故郷へ帰ってしまったからである。この

頃、佐藤氏が心酔したのは、アメリカの詩人であり、わが国ではむしろ探偵小説家としての方が有名な、エドガー・アラン・ポーであった。「詩は最後の一行から書くべきだ」とのポーの発想に刺激された、ということだ。未見だが、ポーの訳集の刊行もされたとのことである。

学校がイヤになって田舎へ帰った佐藤氏は、しばらく家業の農業をしながら詩作に耽った。そこへ、父の友人で裁縫学校を経営していた内木英氏から、今度、高等女学校を作るから来て欲しいと頼まれ、その学校の国語と英語の代用教員になった。内木学園、現在の中京女子大学であり、氏が教壇に立ったのは大正十年四月からである。

この間、東京に残っている横光との親交がとだえたわけではない。いや、むしろ、手紙を通じて二人の仲はますます深くなっていった。前述の河出版・横光利一全集の第十二巻には書簡集が収録されているが、横光の佐藤一英氏宛の手紙が十数通入っていて、大正期に限っていえば群を抜いて多い。しかも、文学や人生の悩み打をちあげたものや、小島勲の妹・キミとの恋愛問題の心中を吐露したものばかりで、これらを読むと二人の関係がいかに固く結ばれていたかの想像はつく。

佐藤氏に横光のことを聞いていて、一番興味深かったのは、横光を菊池寛に紹介したのが、ほかならぬ佐藤氏だっ

たということである。横光が川端康成と菊池寛の知遇を得、菊池門下の双壁として活躍したことは周知の事実だが、その橋渡しをしたのが佐藤氏であったことは、うかつにもはじめて知った。

佐藤氏が菊池寛を識ったのは、『新潮』が「菊池寛氏に對する公開状」を募集し、それに氏が応募し、見事、五編のなかに入ったことからである。大正八年十一月号の同誌に載っている。この入賞が機縁となつて、佐藤氏はたびたび菊池寛を訪ねた。菊池は、詩では飯が食えぬので小説をやれ、としきりにすすめた。が、氏はあくまで詩を作るとがんばったとのことである。そこで、それならば、自分の親友で小説を書きたいと言っている者がいるから、是非会つてほしいと頼み、横光を菊池の所へ連れていった、と話された。それを機会に横光は菊池の所へ通うが、佐藤氏は訪ねなくなった。

こうして菊池の知遇を得るようになった横光は、横光左馬の名で習作を書き続け、しだいにその名をあげていく。田舎にひきこもつた佐藤氏も、初心を貫き詩作を続け、大正十一年十月十三日、処女詩集『晴天』を刊行し、詩壇に登場する。

『晴天』は四六判、本文・五二頁。発行所は、名古屋市中区新栄町三丁目、江崎正文堂。まことにささやかな詩集

ではあるが、萩原朔太郎が『日本詩人』（大正十二年一月号）でさっそく評し、佐藤春夫が序文を書いて、詩人・佐藤一英の出発に花を添えた。

その後、春山行夫らの『青騎士』（大正十一年九月創刊）に参加し、地元での詩活動にたずさわるが、昭和四年、中央への志やみがたく再度上京した。春山行夫たちの『青騎士』については、別の機会にお聞きすることにして、佐藤家を辞した。